

脳と藝術

——「理性」と「感情」の対話——アールブリュットの視座——

有路 憲一

キーワード：大脳新皮質 大脳辺縁系 感情 理性 アールブリュット 発達障害

1. はじめに—脳の三層構造

言語、計算、判断、長期的な記憶等のヒトをヒトたらしめる高次脳機能については、脳の機能の点で、水平方向で語られることが多い(此处で言う“水平方向”とは、脳の断面を見たときに、大脳新皮質なら大脳新皮質のみの一層で捉える見方である)。より正確には、脳断面において高次脳機能の主たる所在は、大脳新皮質(cerebral neocortex)と呼ばれる厚さ2~3ミリ程度の神経細胞の薄い層に置かれるため、高次脳機能については、脳の水平方向でのみしか語れない。

しかし、脳という一つの塊において、大脳新皮質という層の下は空洞であろうか。いや、空洞ではなく、大脳新皮質の下には、大脳新皮質とは機能を異にする神経細胞群・神経線維群から成る構造物が置かれている。

その構造物は、機能の観点により、大きく2つに分かれる。1つは、大脳辺縁系(大脳古皮質・大脳旧皮質(cerebral paleocortex))である。これは、大脳新皮質の下に位置する。「太古の脳」とも呼ばれ、進化的には1億年前と霊長類への進化の過程では最初期にできあがった部位とされている。ヒ

トに進化する前の時代の性質、つまり動物が生きていくために必要な原始的な機能を持っている。大脳辺縁系の中身—機能—には、幾つかのものがある(【海馬】—短期(〜1ヵ月)記憶、【側坐核】—ヤル気、【線条体(被殻・尾状核)】—直感/第六感など)。その中でも、特に【扁桃体】に着目したい。扁桃体は、側頭葉内側の奥、海馬の先端に位置する神経細胞の塊である(次項上 解剖図参照¹⁾)。扁桃体はいくつかの神経核に分かれてはいるが主に、“情動(感情)”



だいのうへんえんけい

大脳辺縁系

太古の脳

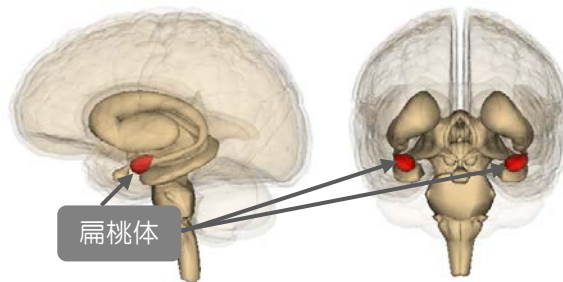
感情—特に、恐れや怒りなどの情

へんとうたい

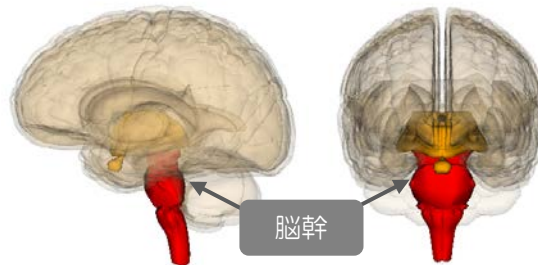
動—を生み出す(扁桃体)。

進化の過程ではじめにできた部分。

を生み出す—好き(怪)・嫌い(不快)、恐れ、怒り、悲しみなどの無意識の感情を喚起する。



そして、もう1つは、その大脳辺縁系の下部に位置する脳幹(brain stem)—延髄・脳橋・中脳(・間脳)—である(下図 解剖図参照²)。



脳幹は、延髄・脳橋・中脳(・間脳)から成る複合体であり、それら部位には大きく2つの機能が備わっている。1つは、呼吸や心臓拍動など循環器の調整(延髄)、体温調節、内臓制御、血圧制御、ホルモン分泌(間脳)などの“生きる”ことに不可欠な働きをコントロールする。そして、もう1つの働きは、“欲”を生み出す(中脳—快樂を生み出す腹側被蓋野など)。このように、脳幹は“生きる”そのものに関与し、生命そのものと言っても過言ではない。

脳幹

生命の命の根源(生命中枢)

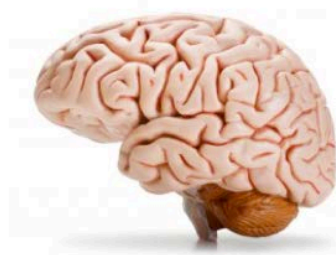
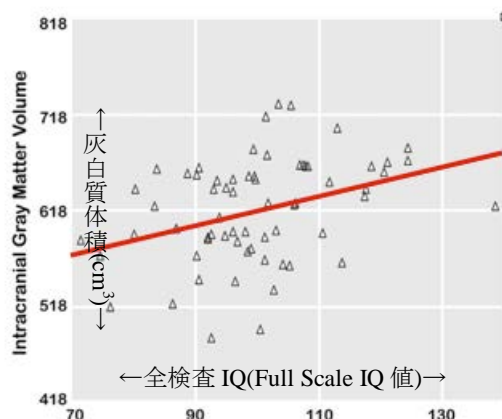
- ① 呼吸・心拍数・血圧の調整、体温調節、内臓の制御、ホルモン分泌など生きていくうえで絶対に欠かせないところ。

脳幹

生命の命の根源(生命中枢)

- ② さらに、生命維持に欠かせない“欲求”—食欲や性欲や睡眠欲などの快樂—の源泉。

このように、脳を水平方向視点からではなく、垂直方向視点で観察すると、脳という一つの塊は、大きく三層の構造物から成り立っていることがわかる。この三層構造を、概略その機能の特徴付けると、下図のようにまとめることができる。3階とは、つまり三層構造の最上部である大脳新皮質を指す。大脳新皮質の機能(高次脳機能)を一言でまとめるなら、大脳新皮質の厚さと賢さ(IQ値)は比例する(Narr *et al.* 2007 右図)ことから推察されるように、大脳新皮質は、ヒトをヒトたらしめる【理性・知性】の所在—“考える”—と言えよう。その下、2階には、大脳辺縁系が置かれ、【感情】の所在—“感じる”—という機能を持つ。最下層の1階には、【理性】【感情】を支えるとも言えるべきそもそもの根源—【生きる】の所在である。



この脳の全体機能を三層構造の観点から分析する見方は、既に Paul MacLean 氏により提案(Triune Brain Hypothesis (MacLean 1990))されている。この三層構造の視点は、簡略的過ぎると批判も受けてはいるが、脳の機能を、垂直方向から見ることで、脳が行うヒトの行動特徴などを新しい視

座で観察し特徴づけ、そして説明できる。そのことを、次節以降で具体的に見てみたい。

2. アールブリュットー生の芸術

アールブリュット(Art Brut)とは、日本語では“^き生の芸術”とも呼ばれ、生の加工されていない芸術全般を指す(アウトサイダーアート、ボーダレスアートとも呼ばれる)。フランスの画家Jean Dubuffet氏により今から 50 年ほど前に提唱された“芸術運動”である。生の加工されていない芸術とは、提唱者Jean Dubuffet氏による定義にはやや揺れはあるが、次の 3 点が不可欠な特徴である—「^①正規の美術教育を受けていない独学の作り手が^②自発的に生み出した、^③既成の芸術のモードに一切とらわれない絵画や造形のこと」³

そして、特に近年注目を集めるアールブリュットは、障害を抱える方たちが紡ぎ出す“芸術”である。発達障害者・発達障害児の芸術は、このアールブリュットの薫

りが色濃く漂っている⁴。芸術表現を行う(彼らのこのような自己表現を陳腐な“芸術”という言葉で表すのが適当かは置いておいて)発達障害者は、多くは正規の美術教育など受けていない(=①)。より正確には、芸術表現を行おうという意図が先にあって美術教育を受けたということではないため、発達障害者の芸術活動に、そもそも美術教育などまったく無意味なほど関与していないと言ってよい。そして、発達障害者の芸術活動を間近で見たことがある方々にはわかるのだが、彼らは「絵を描いてごらん」「造形をしてごらん」と他者から促され、自己の意図ではないところに芸術活動の動機があることはない。つまり、どこまでも純粹に自発的なのである(=②)。描きたいと思うからか、将又描かざるを得ないのか、そこは本人にしかわからないことではあろうが、描かされていることは一切なく、常に芸術活動の原点は本人の中にある。湧き上がる衝動に突き動かされるように、激しいプリミティブな作風を持つ。発達障害者の芸術には、「こう描いてみよう」というような明瞭なる意図はなく、芸術活動の主語は常に「わたし」であるため、結果的に、既成の作られた芸術のモードなどに一切囚われることもない(=③)。なお、外に向けて作品を作るわけではないため、メッセージを発するための作品ではない。

ここで、アールブリュットと呼ぶにふさわしい諸作品を数点観覧してみよう。アールブリュットとは何かは、実際にアールブリュットの諸作品を“体験する”ことによりよくわかる。まずは、日本を代表するアールブリュットの芸術家と言え、やはり「日本のゴッホ」とも呼ばれた放浪の画家 山下清氏(1922-1971)であろう。こちらは、山下清氏の代表作『長岡の花火』と『日本平より富士』である。



『長岡の花火』



『日本平より富士』

彼は、児童福祉施設八幡学園にて貼り絵に出合い、没頭していくのだが、そこに美術教育や美術文化の影響を見ることはない。彼が作り出した作品は、既成の美的規範には収まらない、彼自身の内側から湧き上がる衝動からのみ生み出された純粹無垢なものであり、アールブリュットの範疇に入る。

そして、彼は、自閉症・広汎性発達障害を患っていたと推察されている。更に、サヴァン症候群的特徴の一つに挙げられる直観記憶を備えていたようで、対象をまずは観察しその情景を写真を写すかのように二次元の「絵」として記憶し、その場で描くことはなく、後日、直観記憶で納めた「絵」を記憶から引き出し、アトリエにて色紙をちぎって黙々と画用紙に貼り詰めていったそうである。



細かい作業を一日中ずっと何かに取り憑かれたかのように淡々と描き続ける、そこには恐らく表現せざるを得ない抑えきれない衝動があったに違いない。そこに、意図はない。しかし、そのような無我のまま無心にそして狂氣的に作られた作品であっても、そこからは穏やかな空気、素朴や純粹さが漂うのは不思議である。

次に、“今”のアールブリュットという文脈においては「現代の山下清」と呼んでも良い、現代のアールブリュットを代表する作家 澤田真一氏(1982 年生まれ 滋賀県在住)を紹介しよう⁵。2010 年にフランス・パリ(於 パリ市立アル・サン・ピエール美術館)で開催された「アールブリュット・ジャポネ展(ART BRUT JAPONAIS)」で、彼は世界の注目を集めた(cf. アール・ブリュット・ジャポネ展カタログ編 2011)。50 年前のJean Dubuffet氏が始めたアールブリュットを今に甦らせたのは、澤田真一氏であろう。



『無題』 陶土・自然釉 2006-07
(60(H) mm / 300(W) mm / 300(D) mm)



『無題』 陶土・自然釉 2007
(608(H) mm / 180(W) mm / 200(D) mm)



『無題』 陶土・自然釉 2006-07
(595(H) mm / 225(W) mm / 240(D) mm)

澤田真一氏の作品作りは、はたよしこ氏(ボーダレス・アートミュージアム NO-MA アートディレクター)により次のように紹介されている。

彼は少女のようにしなやかな細長い指で、一つ一つの小さな棘をゆっくりと植え付けてゆく。時折本当に嬉しそうに一人でにっこりして、黙々と制作する。多くの人を魅了するこの不思議な造形は、何かのイメージを追っているのか、それともその場での直感的な思いつきなのかは不明だ。しかし、既に完成形が見えているのかと思うくらいに、なんの迷いもなく制作は淡々とリズミカルな動作で進んでゆく。大きい作品も4~5日で仕上がる。[...] 澤田真一は自閉症という先天的な障害があり、対話はほとんど無い⁶。

[...] この粘土造形によって、自閉症の彼が、1人で空想世界の中を自由に飛び巡り、至福の時を遊んでいるのがよくわかります。それはどこにもない、自分だけが生み出した造形美の宇宙なのです。彼は、言葉で自分を表現することはありませんが、彼の作品は海外を含む多くの作品展で、世界中の人々を魅了しています。もの静かな彼の作り出すものが、異文化の欧米の人々の心をひきつけてしまうのは、文化や歴史を超えた何か、人を揺り動かすからなのでしょう。



もう一人現代のアールブリュット作家を紹介しよう。水谷伸郎氏(1973年生まれ 東京都在住)は、カレンダーの紙から、驚くほど精密な電車模型を生み出す。大きさは全長 20cm ほどであるが、車内には座席もあり、扉も開閉する。実物と寸分たがわぬ形、色、サイズを小さな世界に再現する。



電車

詳細不明(1999~2004年頃)

紙・透明プラスチックフィルム・セロテープ
プ・水性糊・ボールペン・水性ペン・鉛筆

彼の作る紙製の電車は、一見すると人目を引く様な派手さも奇抜さも無い。しかし、じっくりと見るほどに、その繊細で執拗な彼のこだわりを驚嘆する。

1台の車両の長さは約 20cm、高さは 5cmほどと小さく、手に取って車両後方部の出入り口から中を覗くと、彼の細工の神髄がよく分かる。[...] 電車の車両編成数や型の系列なども正確に再現しており、それぞれを 1セットにしてピッタリサイズの自家製収納箱に納めて保管をしている。彼は清掃の仕事に従事しており、様々な材料は廃品の中から集めているようだ。自宅で家族と暮らす彼の制作は自室でのみ。毎日の就寝前の時間や休日には早朝に起き出して作っているという⁷。



ここに紹介した以外にもアールブリュットの作家は数多おり、彼・彼女らの手により生み出されたアールブリュットの素晴らしい作品は無数にある(cf. 代島 2010; DVD「日本のアウトサイダーアート Vol.1-Vol.10 Outsider Art in JAPAN」)。澤田真一氏や水谷伸郎氏のあの純朴な諸作品をはじめ、他にも数多いる作家・作品を紹介したいのだが、紙面の都合上ここに紹介しきれないのは誠に残念である。

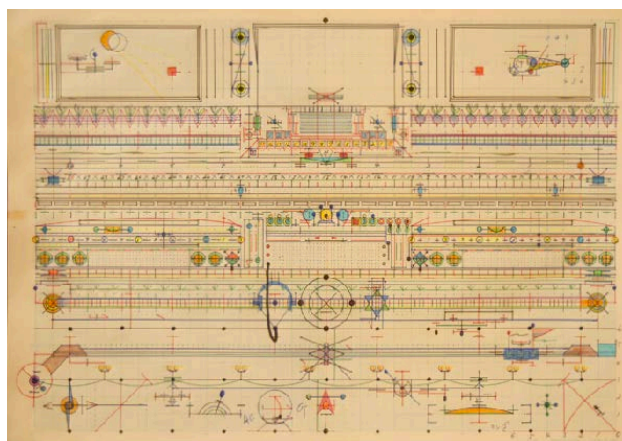
ボーダレス・アートミュージアム NO-MA(社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団)、NPO 法人はれたりくもったり、日本財団のご尽力により、アールブリュットの作品は広く収集され保存されている。そして、アールブリュットの作家及び作品の魅力をより多くの人々に発信・普及していくことにも力を入れられており、アールブリュットの展覧会やワークショップが日本各地で継続的に開催されている。特に、ボーダレス・アートミュージアム NO-MA(滋賀県近江八幡市)では、数々のアールブリュットの作品を所蔵しており、NO-MA にてアールブリュットの現在の潮流を知ることにもできる。このようにアールブリュットに直に“触れる”機会も多々あるので、これら展覧会や美術館に足を運び、是非とも直に自身の眼で肌でアールブリュットの作品を体感していただきたい。

3. 脳の中の芸術－理性と感情の危ういバランス

発達障害者の芸術作品を観察していくと、絵画・造形上に幾つかの共通の特徴があることに気付く。それは、

① 規則的な同種の繰り返しパターン

山下清氏のちぎった色紙、澤田真一氏の無数の棘、草間彌生 女史が描く視野を覆い尽くす“水玉”の群生、或る特定の一字や名前を使いキャンバス一面をびっしりと覆い尽くす画、バス路線図やコンピューターの集積回路(IC回路)のような規則的な紋様により埋め尽くされた絵画(山崎健一氏作品等)など



山崎健一氏作 無題 (コントロールセンター)
制作年不詳
グラフ用紙・コンパス・ボールペン・水性
マーカー・色鉛筆 257(H) mm / 364 (W)
mm

② 強い具象性—曖昧さの除去

絵画であれば、着色はパステルなどの淡い色調ではなく、濃い原色を好む。
造作であれば、柔らかな触線よりも固い明瞭な触線を好む。

しかし、これらの冷静な特徴付けを差し置いて、これらアールブリュットの作品には、観察したものを圧倒する“叫び”が感じられることが、最も際立った特徴であろう。

③ 生々しい叫び—湧き上がる感情の源泉

言葉という道具で表現することには限界、無理があるとさえ思うほどの“何か”が作品からは迸っている。これは、発達障害者による作品を自身の眼で直に見た者にしかわからないであろう。作品から迸っているものは、柔らかな“何か”というよりも、見ているこちらがひりひりする、とても痛々しい“何か”なのである。“美しい”というよりも“痛々しい”、そんな言葉がしっくりくる。本来、覆われているべきもので覆われていない、剥き出しの“何か”とも言えようか。喩えるなら、皮膚が捲れて、真皮の下の細胞組織が赤く剥き出しのままのような状態—まさにアールブリュットは、

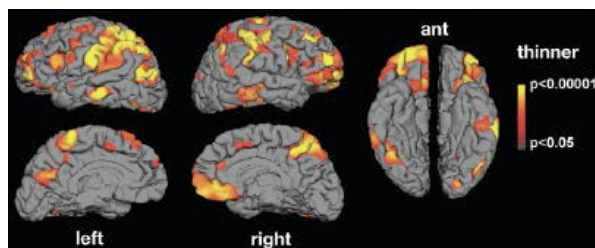
“^き生”なのである。アールブリュット(と呼ばれなくとも発達障害者の芸術表現すべて)は、その作者は、何かを表現する、というそのような大人しいものではなく、表現せざるを得ない衝動に突き動かされるがままに表現しているに違いない。そこに意図「このように描いてみよう」「こんな風に作ってみよう」があるのではなく、それはただただ呼吸するが如く、ただただ感情が吐露しているのである。障害者の芸術作品を、障害を持つのに素晴らしいなどと余計な鼻屑目な見方で表面的な浅い評価をすると見誤る。障害を抱えた結果として、芸術表現がよりプリミティブとなり、痛いまでの魂の叫びが観る者を圧倒する力を持つと正面から評価をするべきである。

このアールブリュットの“痛々しい”芸術表現の様相を、脳の三層構造の観点から見ると、その表現の仕方は非常に自然なことがわかる(翻って、アールブリュットは、脳の三層構造の在り方の妥当性を証明してくれる)。よくある脳の水平方向での見方では、アールブリュットは“ふつう”ではない芸術形式のひとつだという程度のことと終わってしまう。

アールブリュットに観察されるのは、脳の三層構造で言う処の3階【理性】(大脳新皮質)と2階【感情】(大脳辺縁系)の関係である。アールブリュットに於いては、この【理性】と【感情】のバランスが危ういのではないかと考える⁸。大脳辺縁系の【感情】に対して、大脳新皮質の【理性】は、いわば蓋のような役割を果たしていると考えてみよう。【感情】や【欲】の噴出しを、時に【理性】が抑制・抑圧することで、ヒトとしての理性的な行動を選択することができる。【理性】の抑制・抑圧が不必要なほど“強すぎる”と、湧いた【感情】を殺すことにもなる。どちらが強すぎても弱すぎても、バランスを欠く。アールブリュットは、【理性】の蓋が弱く、(仕方なく)【感情】が外

に噴出していると捉えることができる。アールブリュットから迸っている、痛々しいまでの剥き出しの“何か”とは、【理性】による希釈を受けない生の【感情】そのものなのである。つまり、アールブリュットの作品は、作者の脳の1階【欲】2階【感情】がそのまま外にカタチとなって現れたものなのである。

【理性】の蓋が弱く【感情】が吐露しているのか、【感情】が強く、【理性】を打ち消しているのか、双方の可能性がある。しかし、発達障害者(ここでは自閉症者)の脳構造を観察すると、大脳新皮質(全体でなくとも)が、有意に薄いことが指摘されている(Hadjikhani *et al.* 2006 等)―健全常群と比して、自閉症者の方が大脳新皮質の厚いという部位はなく、自閉症者の脳では、表情表出に関わる皮質部位、顔認知に関わる皮質部位、模倣に関わる皮質部位が有意に薄い。(【理性】が宿る大脳新皮質が薄いからと言って、発達障害の方々【理性】を欠いていると指摘しているのではない。)



大脳新皮質【理性】による蓋が弱いがために、湧きおこる【感情】を抑制することなく、【感情】が吐露している。その【感情】の表出は、意図しているというよりも、抑制できない、いわば漏れ出してしまっており、その漏れ出してしまふ【感情】を“芸術”という一つの表現形式で形にしていると考えられる。アールブリュットの作品は、外からは見えない脳の2階【感情】そのものなのである。なお、【感情】を表現する方法には、“芸術”の他にも“言葉”もある。つまり、【感情】という曖昧模糊としたものを、“言葉”という形で翻訳することもできる。しかし、発達障害(特に自閉症)の特徴の一つに言語発達の遅延があり、【感情】を言語化、言葉で翻訳することはあまり得意ではない。

他に、ここでの見方の妥当性を支持しうる実証研究に次のようなものがある。サヴァン症者が見せる類まれなる能力―ここでは芸術能力―の在り処を巡っては、諸説あり、「障害のある左脳の機能不全を補うために右脳が類まれなる能力を持つに至った(Treffert 2000, 2011; Treffert & Wallace 2004)」という説と「脳の深部に類まれなる能力がある(Snyder 2009; Snyder *et al.* 2003, 2006; Chi & Snyder 2011, 2012; Chi *et al.* 2010)」という説がある。後者の説を唱えるSnyder氏は、(その仕組みは具体的に語ってはいないものの)本稿の考え方と同じく、大脳新皮質【理性】が、脳の深部にある類まれなる能力に蓋をしていると考える。氏曰く、凡人は、大脳新皮質を意識することはできないために、脳の深部にある類まれなる能力が表出することはない。しかし、サヴァン症者は、【理性】の蓋が弱いがために、脳の深部にある類まれなる能力を自由に発揮することができる。氏は、その仮説を証明するために、健全者にrTMS(反復経頭蓋磁気刺激)やtDCS(経頭蓋直流電気刺激)を用いて、3階の下にある2階または1階部分に刺激を与えてみる実験を試みている(Snyder 2009; Snyder *et al.* 2003, 2006; Chi & Snyder 2011, 2012; Chi *et al.* 2010)。【理性】を弱まらせることで、その下にある何かを表出しやすくなり、閃きや発想を得やすくなる可能性を示唆している。誰もが持っている【感情】に【理性】の蓋があるか、ないか―その差がサヴァン症者の芸術能力を説明する。

発想の転換が必要な問題(insight problem)を解く際に、【理性】の縛りがあるとその固定的な解釈(mental set effect)から逃れられず問題を解けないということは、誰もが一度は経験したことがあるであろう。例えば、マッチ棒の数式問題(matchstick arithmetic) — 「下記の数式のマッチ棒を1本のみ動かして、正しい数式にしてください」



9つの点問題(nine dot puzzle) — 「4本の直線で、9つの点をすべてつなげなさい」



これら発想の転換が必要な問題は、“ふつう”の人はほとんど解けない(マッチ棒の数式問題の正答率は10%以下である(Öllinger, Jones & Knoblich 2008))。



しかし、これらの融通の利かない固定観念「数式のイコールは、1つの数式につき1つである(通常の数式ではダブレイコール $0=0=0$ はなかなか見ない)」「点を線で繋ぐときに、枠の外にはみ出さない」から離れないと解くことができない或る意味難問を容易に解くことができる人たちがいる。それは、前頭葉外側を損傷した人たちである。前頭葉外側を損傷した人たちでは、80%以上の人たちが、この難問を解くことができる(Reverberi *et al.* 2005)。

このことは、上述したSnyder氏の説を裏付ける。大脳新皮質(前頭葉外側)が働かないために脳の深部にある何かが外に出やすくなっている。つまり、【理性】の蓋が取れたおかげで、固定的な考えに縛られることなく、閃きを得やすくなっているようである。Snyder氏らは、健常者にrTMS(反復経頭蓋磁気刺激)やtDCS(経頭蓋直流電気刺激)をおよそ10分間側頭葉に照射することで、発想の転換が必要な問題が解ける率が3倍近くにまで上がることを示している(Chi & Snyder 2011, 2012; Chi *et al.* 2010)。創造性発揮にとっては障壁となる大脳新皮質部分(左前側頭葉)を抑制しオフにすることで、脳の深部から閃きが湧きやすくなる。

これらの研究事例が意味するところは大変興味深い。芸術に欠かせない創造性は、誰の脳にもあるようではあるが、それは脳の深部にある。深部にある創造性は、表層の壁—大脳新皮質—に塞がれ蓋をされ、容易に表出されえない(だからこそその独創性とも言える—誰でも簡単に手軽に創造できては重みがない)。その壁がなくなると、脳深

部の創造力が、湧き出るのである。発達障害の方々は、この壁が弱いようである。そのため、自然と脳の深部にある創造性が止め処もなく溢れ出るのであろう。

本稿のような脳の三層構造から芸術を見ると、創造性と狂気は紙一重という陳腐な言い回しも、リアリティを持つ。芸術家などの創造性を要する職に就いている人たち(120万人に調査)は、本人自身かその親族に、双極性障害の病歴を持つことが極めて多い(Kyaga *et al.* 2012)。芸術作家に限定すると、本人またはその親族に、統合失調症や双極性障害(躁鬱病)、鬱病などの病歴を持つことが多い。そして、親族を親か子に限定すると、創造性を要する職に就いている人々は、その親か子に統合失調症や双極性障害、神経性の無食症の病歴が多く、そして兄弟には自閉症者が多い。

このように創造性と“障害”には、強い相関関係がある。この数字上での関係は、相関でしかなく、それ以上の事は何も語らない。しかし、脳の三層構造の観点から、この相関を見ると、この数字上の関係性に意味を付与することができる。創造性と“障害”の関係には、相関ではなく因果関係があり、その因果とは、“障害”を持つが故に、結果的に、創造性が豊かに発揮されるに至ったと考えられるのである。創造的だから障害を抱えてしまったのではなく、障害を抱えた結果、創造性を手に入れた。創造性の源泉が、脳の1階や2階にあるとすると、大脳新皮質【理性】の蓋が弱く薄いため、創造性が自然と外に出る。創造性があるが故に、狂気になったのではなく、狂気であるが故に、創造性が花開いた、そう考えられるのである。

統合失調症を患っていたとされるかの名画家ヴィンセント・ヴァン・ゴッホにも、奇抜さを敢えて意図したような演出は微塵たりともなく、【感情】の迫力を感じる。



『夜の白い家』

ゴッホ晩年の代表作『夜の白い家』には、時間帯的には昼頃のように見えるのに、光る星が1つ描かれている。ゴッホの空想かとも思えるのであるが、天文学者ドナルド・オルソン氏は、現地の「白い家」を発見した後、絵と同じ角度の夜空をシュミレーションにて再現すると、この『夜の白い家』は1890年6月16日午後7時から午後8時に描かれたものであることが判明した。そして、『夜の白い家』に1点輝く光る星は、同日同時刻に空に輝いていた金星(宵の明星)であることがわかった(Olson & Russell 2001)。このことにより、ゴッホの絵は、幻想や妄想による描写ではなく、非常に正確且つ厳密、リアルであることが窺い知れる。ゴッホ作品を特徴付けるうねる線(『星月夜』や『自画像』)も、彼にはそう見えていたのかもしれない。障害を抱えている芸術家の芸術表現には、【理性】がもたらす意図的な策略のようなものは感じられない。【感情】のまま、【見た】ままを、そのまま表現している。もちろん、芸術という名の下、技術的に優れ何かを自覚的に意図した作品もまた芸術ではあるが、意図などない無自覚な芸術もまた芸術である。

ピカソは、最後に辿りついたのは、「子どものような絵」だったそうである—この年になって、やっと“子どもらしい”絵が描けるようになったと。ピカソ曰く、「私は、ラファエロのように描くのに4年かかった。しかし、子どものように描くためには一生かかるだろう」と。大人は、【理性】が付くことで、純粹に【感情】のまま、感じたことを表現できにくくなるのであろう。子どもは、まだ大脳新皮質が未発達であるが故に、【理性】の蓋が弱い。【理性】が付くと、そのままを、上手く描こうという意図などなしに、無防備なまま表現することが困難になるのであろう—【感情】をそのまま表出させることができなくなる。ピカソの言葉を借りれば、【理性】がまだ未発達な子どももまた無垢な芸術家—アールブリュットなのであろう⁹。

4. 脳と芸術—剥き出しの感情

アールブリュット—発達障害の方々の手による芸術作品は、確かに技術的には未熟かもしれない。しかし、そのようないわば表層的なことはどうでも良いと思わせるほどの何かは頑なにそこに存在する。それが、観るものを圧倒する。芸術とは何かの本質がそこにある。

これらアールブリュットを脳の三層構造から見つめ直すと、芸術とは【理性】を“無”とした原始的な【感情】の吐露が肝であることに気付かされるのである。アールブリュットの作品をただ眺めるだけでは、ただただ圧倒されるだけで終わってしまう。芸術とは何かも曖昧なままであろう。アールブリュットの真の凄みや、芸術の本態は、脳の三層構造の視点で眺めてみると良くとわかる。【感情】の表出が芸術作品を“芸術”たらしめる1つのファクターなのだとしたら、発達障害者の芸術作品こそ“芸術”なのである。【感情】が剥き出しなのだから—。脳の三層構造から“芸術”を眺めると、まさに「芸術は爆発」なのである。

注

- ¹ *Anatomography* (Life Science Databases(LSDB))より参照
- ² *Anatomography* (Life Science Databases(LSDB))より参照
- ³ 「美術文化の影響を受けていない人々が創造する作品、既成の美的規範から外れた、作者自身の内側から湧き上がる衝動からのみ生み出される純粹で生のままの作品」「芸術的訓練や芸術家として受け入れた知識に汚されていない、古典芸術や流行のパターンを借りるのではない、創造性の源泉からほとぼしる真に自発的な表現」など、定義としての文言はいろいろあるが、①美術教育・美術文化には染まっていない、②衝動による自発性、③既成のパターンには嵌らない、という3点が共通する特徴付けである。
- ⁴ “(広汎性)発達障害”は飽くまでも総称であり、個別の障害毎—自閉症スペクトラム、アスペルガー症候群、高機能自閉症、その他特定不能の広汎性発達障害、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(AD/HD)—に芸術表現の特徴など多様であることが予想されるが、個別の障害毎の分析は今後の研究の課題とし、本稿では発達障害という大きな括りで論を進めていく。
- ⁵ 澤田真一氏、水谷伸郎氏には、本稿への貴重な諸作品の掲載を快く承諾していただいた。ここに心より感謝申し上げたい。また、両氏との仲介をしていただき諸作品の紹介を頂きましたボードレス・アートミュージアム NO-MA アールブリュット・ジャポンの斉藤誠一氏にもここに深く感謝の意を表したい。
- ⁶ 出所 SAM (Spirit Art Museum) <http://www.spiritartmuseum.jp/jp/permanent-collection.php?artist=037>
- ⁷ 出所 SAM (Spirit Art Museum) <http://www.spiritartmuseum.jp/jp/permanent-collection.php?artist=061>
- ⁸ 本稿(第三節)の考察はまだまだ科学的根拠にも乏しく(科学的根拠の有無とはすぐわかない内容でもあるが)、萌芽的な考察が多い。或る程度の独創性が許され得る研究ノートとして扱っていただきたい。なお、本稿で述べている洞察は、成瀬政博氏(画家)との対談に寄るところが大きく、多くの示唆、刺激を与えて頂いた。そして、関口あさか女史(埼玉県立熊谷特別支援学校 教諭)からの実地による報告も非常に参考となった。両氏には、ここに記して深く感謝申し上げたい。
- ⁹ “無垢”という点に重きを置き、ダウン症者の芸術作品を、アール・イマキュレ(Art Immaculé 無垢の芸術)と呼び、アールブリュットとは区別する人もいる(cf 中沢 2012)。

参考文献

1. Chi, R. P., Fregni, F. & Snyder, A. W. 2010. Visual memory improved by non-invasive brain stimulation. *Bran Research* 1353, 168-175.
2. Chi, R. P. & Snyder, A. W. 2011. Facilitate insight by non-invasive brain stimulation. *PLoS ONE* 6, 1-7.
3. Chi, R. P. & Snyder, A. W. 2012. Brain stimulation enables the solution of an inherently difficult problem. *Neuroscience Letters* 515, 121-124.
4. 代島治彦 2009. 日本のアウトサイダーアート Vol.1—Vol.10 Outsider Art in JAPAN(DVD). 紀伊國屋書店
5. 代島治彦 2010. アウトサイダー・アートの作家たち Outsider Artists of Japan. 角川学芸出版
6. Kyaga, S., Landén, M., Boman, M., Hultman, C. M., Långström, N. & Lichtenstein, P. 2012. Mental illness, suicide and creativity: 40-Year prospective total population study. *Journal of Psychiatric Research* 47, 83-90.
7. MacLean, P. 1990. *The Triune Brain in Evolution: Role in Paleocerebral Functions*. Plenum Publishers.

8. 中沢新一. 2012. 野生の科学 La Science Sauvage. 講談社
9. Narr, K. L., Woods, R. P., Thompson, P. M., Szeszko, P., Robinson, D., Dimtcheva, T., Gurbani, M., Toga, A. W. & Bilder, R. M. 2007. Relationships between IQ and regional cortical gray matter thickness in healthy adults. *Cerebral Cortex* 17, 2163-2171.
10. Olson, D. W. & Russell, L. 2001. Identifying the “star” in a long-lost Van Gogh. *Sky & Telescope* 101, 34-39.
11. Ollinger, M., Jones, G. & Knoblich, G. 2008. Investigating the effect of mental set on insight problem solving. *Experimental Psychology* 55, 270-282.
12. Reverberi, C., Toraldo, A., D’Agostini, S. & Skrap, M. 2005. Better without (lateral) frontal cortex? Insight problems solved by frontal patients. *Brain* 128, 2882-2890.
13. Snyder, A. W., Mulcahy, E., Taylor, J. L., Mitchell, D. J., Sachdev, P. & Gandevia, S. C. 2003. Savant-like skills exposed in normal people by suppressing the left fronto-temporal lobe. *Journal of Integrative Neuroscience* 2, 149-158.
14. Snyder, A. W., Bahramali, H., Hawker, T. & Mitchell, D. J. 2006. Savant-like numerosity skills revealed in normal people by magnetic pulses. *Perception* 35, 837-845.
15. Snyder, A. W. 2009. Explaining and inducing savant skills: privileged access to lower level, less-processed information. *Philosophical Transactions of the Royal Society B* 364, 1399-1405.
16. Treffert, D. A. 2000. *Extraordinary People: Understanding Savant Syndrome*. iUniverse.
17. Treffert, D. A. 2011. *Island of Genius: The Bountiful Mind of the Autistic, Acquired, and Sudden Savant*. Jessica Kingsley Publishers.
18. Treffert, D. A. & Wallace, G. L. 2004. Islands of Genius. *Scientific American MIND* 14(1), 14-23.
19. アール・ブリュット・ジャポネ展カタログ編. 2011. 現代企画室

(信州大学 全学教育機構 准教授)

2013年1月28日受理 2013年2月28日採録決定